

重症集中ケア認定看護師会たより



発行 2007 年 2 月 発行人：中嶋美和子 編集：境野・大貫

重症集中ケア認定看護師会 2006 教育セミナー レポート

開催日：9 月 30 日（土）、10 月 1 日（日） 場所：大阪 新梅田研修センター 参加者：1 日目 127 名、2 日目 190 名

今年度の教育セミナーは、昨年度の定例会アンケートで要望が多かった内容を盛り込み、1 日目を「臨床現場での看護師教育」、2 日目を集中治療領域における「インシデント対策（ライン抜去対策）」をテーマとしてセミナーを企画し、開催しましたので報告いたします。

第 1 日目：テーマ「臨床現場での看護師教育」



講演 1：日本看護協会看護研修学校校長 道又元裕先生から「育てること・育つこと」というテーマで講義をして頂いた。育てる、育つという大きな概念から、「教育」「指導」「教える」「学ぶ」という言葉に絞られた。教育や指導は、年長から年少へ、先輩から後輩へというような上下関係で成り立っている事が多い。教育は望むとおりに意図的に育てる、変えること。意図的に育てることは、育てる側に責任が生まれてくる。育てる立場で教育を考えると、その病院環境に順応できるように教育している。学ぶ、学習するとは何か。学習とは、他から指導を受けることなく、教師や指導者から離れて独立独歩の展開に発展すること。看護職は生涯学習である。そのため、教わる側は少しのアドバイスで自己学習が進められるように支援、援助していく。自立した自己教育者に育てるためには、教育を受ける側の興味や関心に訴えることであるという内容であった。

講演 2：日本看護協会教員のの中田諭先生から「プレゼンテーションの肝」というテーマで講義をして頂いた。相手に熱いメッセージを伝えるには、何よりもその教える内容を自分が熟知することが大切である。その上で自分は何を相手に伝えたいのかストーリーを作る。たくさん相手に伝えたいと思えば内容が多くなりやすいが、時間と相手の集中力、自分の伝えたい内容を絞り込むことが大切である。また、パワーポイントなどの教材も相手の関心をひきつけられるように極めていく事が大切であるという内容だった。



シンポジウム 1：「現場教育の実践」では、各施設での教育の取り組みについて、重症集中ケア認定看護師 3 名のシンポジストに報告して頂いた。院内の新人教育において、実際の到達時期と目標の時期を比較し、検討した結果から教育計画を現場でフィードバックしていること。また、RST（呼吸サポートチーム）による院内教育も行っており、初級、中級、上級のレベル別教育を提供し人工呼吸器ケアの標準化に繋がられている施設。ラダー別でフィジカルアセスメント、人工呼吸管理などを開催している施設。看護ケアチームの再構築を実施し、その結果、現任教育と現場教育との解離の縮小、スタッフの教育課題の整理、スタッフが自主的に取り組めることができたという内容が報告された。シンポジストの方々の幅広い活動内容をお聞きすることが出来た貴重な時間であった。



会場からは、教育を受ける側である新人看護師からの「受ける側の意見」が聞かれ、積極的な意見交換が行われた。

イブニングセミナー：「認定看護師の臨床教育の壁」では、重症集中ケア認定看護師として経験や病院環境が違う場で活躍されている三重大学附属病院の大原美佳さん、神奈川県立こども医療センターの杉澤栄さんの発表があった。

認定看護師として 2 年目になる大原さんは、院内での勉強会を開催しているが参加者が少ない。また、カフ圧や口腔ケアなどのコンサルテーションがあっても結果が出せないことが臨床教育での壁となっているとの報告があった。一方、重症集中ケア認定看護師活動 8 年目の杉澤さんは、初めのころは院内や院外の認定活動の基盤づくりから始める必要があり、そのことが臨床教育での壁となっていたこと。コンサルテーション活動については、現場の看護力が向上し、他の患者へのケアに活かされているのか疑問を感じた。当初は、自らが主体となり患者のケア計画立案や実践をすることが多く、そのことが臨床教育での壁となっていたのではないかと考え、現在では依頼した看護師自身が主体となってケア計画立案や実践ができるよう関わるようにしているとの報告があった。

会場からは、重症集中ケア認定看護師の分野は、治療との兼ね合いもあり認定看護師独自の結果として切り分けることができない。そのため、診療報酬につなげることが困難である。しかし、何かに向かっているから壁があるのであり、このようなセミナーで多くの認定看護師が報告会で情報を共有することが大切なのではないかという意見があった。

第2日目：テーマ「インシデント対策（ライン抜去対策）」

講演3：「集中治療領域でのインシデント・アクシデント」～チューブ管理と輸液・シリンジポンプを中心に～、講師は杏林大学保健学部教授の川村治子先生から講義をして頂いた。



講義の冒頭では、「集中治療室は荷物満載のトラックの行き交う交差点、通過するトラックは荷物もスピードもさまざま、そして、運転手もさまざまで、医師との情報共有が極めて重要である。」と例えられ、集中治療室の現場をわかりやすく表現されていた。事故防止の視点である『してはならないことをしない』では、集中治療室で必要な知識・技術を100%身につけるのは不可能であるため、危険の重大性でメリハリをつけていく必要がある。もう一つの視点として、『すべきことをする』という、事故の危険性を予測してせん妄の発生予防、患者の病態・状態に応じた対策や起こることを想定した一定水準の対策など被害軽減策の必要性について講義して頂いた。



講演4：「チューブ・ライン抜去を防ぎたい！リスクマネジメントに認定看護師がどう関わるか」では、岡山大学医学部歯学部附属病院、医療安全室でリスクマネージャーをされている重症集中ケア認定看護師である足羽孝子さんから、日々、安全対策に取り組みまれ、実践されている内容を報告していただいた。

取り組みの1つとして、ライン識別シールを導入し、実際の事故の内容を盛り込み院内に配信を行っている。また、現場教育に危険(K)予知(Y)訓練(T)の実施として自己抜管の事例から物品管理の見直しや、患者急変時のシミュレーション研修を行い、院内救急体制のシステム改善、医療者のモチベーション向上につなげられた実践を報告いただいた。チューブ・ライン抜去には、患者側の要因としてせん妄の発生が大きく、せん妄のアセスメント、予防・介入方法を教えていただいた。

シンポジウム2：「ここがポイント！効果的で安全なライン固定法あれこれ」では、10名の重症集中ケア認定看護師から各施設でのライン固定法を紹介していただき、最後にWOC認定看護師である末平智子さんから「粘着テープによる皮膚障害」について講演をして頂いた。事前に配布していた質問用紙には、固定の器具やテープ、スキントラブルに関して、安全性を考えた固定、コスト面などのいろいろな質問が寄せられていたため、活発な意見が交換されていた。参加者は、現場で多くの疑問や困っていることを抱えており、解決したいという前向きの姿勢が伺えた。

最後に：今回の教育セミナーは、重症集中ケア認定看護師だけでなく一般看護師の参加も多くありました。アンケートには、「現場教育では認定看護師、リーダーナースとして、どう教育に関わっていくかということについてのヒントを得ることができた」「他施設のチューブ・ラインの固定方法を色々知ることができ参考になった」などの意見が多くありました。参加者が情熱を持って日々看護を行っている事を肌で感じる事ができたセミナーでした。

クリティカルケアに関心のある方、日頃のケアでの悩みや疑問、効果的なケアの報告など、多くの意見交換を行い共有していくことが実践の成果につながると思います。重症集中ケア認定看護師会では、教育セミナーでのアンケート結果などから注目すべきテーマに着目して来年度も開催する予定です。多くの皆さまに参加して頂き貴重なセミナーを開催できたことに感謝しています。ありがとうございました。次回の教育セミナーにおいても、皆さまにお会いできることを楽しみにしています



重症集中ケア認定看護師会



来年度は、学会やクリティカルケア領域の情報を充実し、会員の皆様の期待にそえるようなHPになるよう努力してまいりたいと思っています。

来年度も会員の皆様の声を大切にし、より興味を持てる内容広報活動を考えています。

是非、ご意見・ご感想をお聞かせ下さい。お問い合わせは、ホームページの広報宛にご連絡下さい。

重症集中ケア認定看護師会：<http://www.icu-cen.jp/>